Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

147

乳幼児社会性発達のプロセススケールに関する研究⑫

○鶴宏史（神戸親和女子大学）　米倉裕希子（大阪府立大学大学院）　和知富士子（堺市役所）　安藤忠（神戸親和女子大学）　中新井澪子（大阪市私立幼稚園連合会）　川原佐公（桜花学園大学）

[はじめに]

本発表は、「乳幼児社会性発達のプロセススケールに関する研究⑪」に引き続き、個別の事例をあげて、このスケールの実践での活用について報告する。

[事　例]

生年月：平成10年9月

障害名：軽度発達遅滞、自閉的傾向

生育歴：出産時身長47cm、体重2,230g（満期出産）、定頸4ヶ月、這う8ヶ月、始歩1歳1ヶ月。3歳児健診で視線が合わない、落ち着きがない、言葉が遅い等を指摘され、病院で検査を受ける。新版K式でDQ58、DA1:10。3歳6ヶ月で保育所入所。

既往歴：ぜんそく。時折、吸入するが日常生活には支障がない。

家族　：母、兄、本児の3人家族。本児が2歳の頃に離婚。母方祖母は近所に居住しているが体調を崩している。母親は仕事と祖母の世話のため多忙で、本児や兄とゆっくりとかかわれていない。

●1回目のチェック時点での発達状況（3歳7ヶ月）

行動；機関車トーマスがお気に入りで、よく絵本を見る。落ち着きがなく動き回る。様々な物に手を出すが、用途に応じた使用はできず長続きしない。生活の流れの中で次の行動に移りにくい。

言語；単語レベル（「トーマス」「ババ」）であるが、言語表出に比べて言語の理解は高い。要求はクレーン。視線が合いにくい。

<1回目スケールチェック>

全項目において、0・1歳代であり、タイプⅠの未熟型であった。

A：入所当初はスムーズに母子分離ができたが、しばらくするとレベル2、3の行動が目立ってきた。

B：入所当初は緊張もほとんど見られなかったが、すぐに極度の不安・緊張が現れた。

C：様々な物に手を出すが、長続きはしない。

D：制止されもその保育者を見るだけで、感覚的な理解はしていないように思われる。

E：自己の衝動に任せて行動することが多い。

F：社会的微笑や人見知りなどの状況に応じた感情が表出される。

G：集団の激しい動きなどに関心を示しているのか、時折集団を見ることがある。接近はしない。

H：保育者に対して不安や緊張を示すことはない。

I：他児の大きな声や歌声には注意を向ける。

J：他児と保育者との関わりにはほとんど無関心であるが、楽しそうにしている時（笑う、歌うなど）は注目している。

<保育所での対応>

1．しばらくの間、本児の気に入った場所で、好きなことをさせ（危険な場所・行為は除く）、保育者がそれに付き添うことで、共有する経験を重視し、本児と保育者との一対一の関係を強め、情緒の安定を図り、保育者との関係をよいものにする（B及びHへの対応）。

2．本児からのコミュニケーションを見逃さず、適切に返していく。また、場面に応じた言葉かけを行う。

3．母親の状況を受容し、寄り添い、共感的理解を持って関わっていく（A及びBへの対応）。

●2回目のチェック時点での発達状況（4歳6ヶ月）

母親自身も現在の生活に慣れ、また、保育者との関わりの中で子育てに関する相談等をするようになってきた。

行動；保育所での生活に慣れ、情緒的にも安定し、自分でできることも増えてきた。手伝おうとすると「イヤ」と拒否する場面も見られる。保育者との関係は良好で、保育者に抱っこされたり、こちょこちょされるのを好む。他児からの働きかけを嫌がることはないが、自ら働きかけることはほとんどない。集団遊びでは、保育者が呼ぶとその場にいるが、すぐに離れる。

言語；「これとって」「トーマス好き」など二語文。

<2回目スケールチェック>

A、B、D、E、Hの項目に比して、C、F、G、I、Jの項目が年相応の発達より低く、タイプⅢに近い形を示している。

NII-Electronic Library Service

Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

C：保育者の動きを模倣する場面が見られる。
F：手伝われたり、他児の働きかけに対して「イヤ」と拒否する。
G：特定の歌や遊びに対して注目するといった行動が見られる。接近はしない。
I：他児の持つおもちゃや絵本をとろうとして拒否されたり、渡された場合、他児の顔を見たりする。
J：他児と保育者との関わっている時に、保育者に近づいてくる。

＜保育所での対応＞

1．保育者との関係が安定してきたと考えられるので、一対一の関係から少しずつ対人関係が広がるような環境を構成する。具体的には保育者と本児との関わりの中で他児が接近した時には子ども同士で関われるような援助を行う。逆の場合も同様に援助する（G、I、Jへの援助）。
2．好きな遊びを十分に楽しみながら、遊びの幅や興味の対象を拡げていく（C及びIへの援助）。
3．自分でできることはゆっくりでいいので、最後までやろうとする気持ちを大切にする。
4．母親の状況を受容し、寄り添い、共感的理解を持って関わっていく。また、相談に応じながら、本児の保育所での様子も伝えていく。

●3回目のチェック時点での発達状況（5歳6ヶ月）

行動；2年間の保育所生活で、生活面でできることが増え、安心して遊べるようになる。他児や集団に対する関心は2回目のチェック時点より強まり、自ら他児に働きかけたり、集団への参加は困難であるが、保育者の援助があれば可能である。家庭においても安定している。

言語；ほとんど二語文である。

＜3回目スケールチェック＞

2回目のチェック時点で低かったC、F、G、I、Jの項目のうちG、I、Jは3歳代でとどまっている。

C：他児がトーマスの絵本を見ているとさっと手を伸ばしケンカになる。
G：好きな歌や踊りになると集団と同じ行動をとる。他児との関わりはない。
I：保育者の援助があれば、他児と関われる。
J：レベル5～7の間の行動が見られ、他児を意識をしていると思われるが、三者関係の成立までには至っていない。

＜保育所での対応＞

昨年に引き続き（2回目のチェック時点）、同じ対応で取り組むことにした。

［考　察］

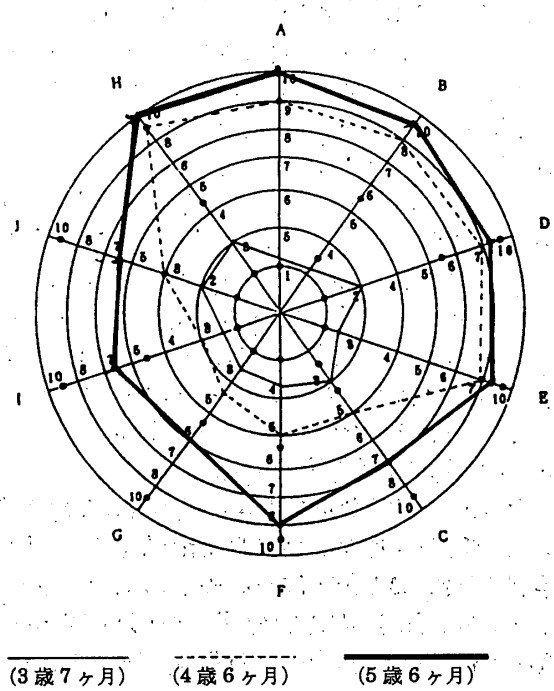
本事例では、保育所入所すぐのチェックでタイプⅡ「未熟型」であった。1年目は、保育者との一対一の関係を軸に子どもの情緒の安定を図ることと、言葉や身辺処理、集団への参加に関しては子どものペースに合わせることに目標を置いて、援助を行った。同時に家庭の状況も考えて、母親への働きかけも平行して行った。このような対応によって情緒面や保育者との関係が安定し、保育所での生活に徐々に慣れていった。

2回目のチェックでは、タイプⅢ「D型」へ移行している。保育者との良好な関係が形成されて、保育者の動きを模倣したり、自己主張も見られるようになった。自己主張や主体性の尊重、場面に応じた言葉かけ、言語の発達などによって制限の理解や自己制御の発達も促されたと考えられる。

3回目のチェックでは、2回目のチェックに比べてタイプI「標準型」へと広がってはきている。他児との関係や集団への参加に関しては年齢相応に達していないが、他児に対する関心が現れ、また、保育者の援助があれば関わることも可能となった。今後も、他児との交流や集団参加への援助が課題となった。

このようにスケールを用いることで、保育の手立てや援助の見通しが立てることができた。

図　社会性発達の変化



NII-Electronic Library Service